

■(井上)井月 伊那の放浪俳人。庶民の間で俳句が最も盛んで、宗匠がスターだった維新前後、一地方に大きな足跡。

せいげつ

英船浦賀来航1822= 越後長岡藩の武家に生まれるか。本名は井上克三が有力。

日本外史・・・1827= 5歳：この年、小林一茶が死去。

富嶽三十六景1831= 9歳：この頃、北野五律が伊那から江戸に旅立つ。

大塩平八郎乱1837=15歳：

勅進帳初演・1840=18歳：

阿部正弘首座1845=23歳：

どこで俳句の修業をしたのか分からないが、芭蕉の俳句法だけでなく、芭蕉の精神を学び、生き方に従うことを目的とするようになったらしく、

・・・1848=26歳：この頃、現在の長野県中野市で一句を揮毫。

北斎没・・・1849=27歳：

万次郎帰国・1852=30歳：善光寺大勸進の母の追悼句集に一句が載る。

ペリー来航・1853=31歳：'稲妻や網にごたへし魚の影'が句集に載る。

この間、書道の達人にもなり、日本の古典や漢籍に精通、西洋の学問にも一流の知識を蓄えて、それまで武家の矜持を保ってきたが、剃髪して僧形となり、

五ヶ国条約・1858=36歳：この頃、*伊那に姿を現し、以後、多数の弟子を養成、伊那に広がる彼らの家を訪ねながら過して行く。

桜田門外変・1860=38歳：

遣欧使節・・・1861=39歳：

四徳(中川村)で句を揮毫。_伊那出身で京都で宗匠になった北野五律を訪ねることを契機に、(翌年か)京都

、江戸、奥羽などへの旅に出発、五律の縁で、江戸の関為山ら各地の大物俳人たちから句を集め、

生麦事件・・・1862=40歳：

小冊子「まし水」刊。_信州の人々の支援を受けて、伊那の俳人を中心に、地域別に集成して、

8月18日政変 1863=41歳：

*格違いの高遠藩家老岡本菊叟を訪ねて快く受け入れられ、その序文を得、ただ一句の自作を末尾に添えた句集「越後獅子」を刊行、

禁門の変・・・1864=42歳：

善光寺宝勝院に顔見知りの梅塘を訪ね、その序文を得、_姉妹編ともいえる第二句集「家づと集」を刊行。

薩摩藩士密航1865=43歳：

市原多代女が死去。_北野五律が死去し、

大政奉還・・・1867=45歳：

明治維新・・・1868=46歳：

_維新となって、伊那も安住の地ではなくなり、

学問のすすめ1872=50歳：

のちに井月の句集を自費出版することになる伊那の医師下島勲の5歳の袴着を祝って'袴着や酒になる間の座の締り'と詠む。*自らを伊那から追い出そうとする企画(柳廼家送別書画展覧会)まで開催され、長岡へ帰郷するも所を得ず、伊那に戻り、

明治6年政変 1873=51歳：

新政府の"国民思想善導"の教導職に推された江戸俳壇のボス関為山が(俳諧教林盟社)を結成して社長になり、全国に勢力を拡大するなか、そのメンバーとなる。

三つの反乱・1876=54歳：

伊那でとくに関係の深い地四徳の小澤思耕家の棟木に揮毫(飲み過ぎで寝込み、翌日、足場を作ってもらって仰向けに)。この頃「柳の家宿願稿」を執筆。

西南戦争・・・1877=55歳：

馬場凌冬と両吟歌仙二巻など。

_アルコール依存症となるも、なおお寺社への奉額や家々への揮毫を多数続け、

明治14年政変1881=59歳：

新体詩抄・・・1882=60歳：

_加納有隣と両吟歌仙、百二十句の連作を行うなど、なお軒昂としていたが、みずぼらしい老人となって、知合いの家を一軒ずつ回り、酒や粥を乞うて、排除もされるうち、

秩父事件・・・1884=62歳：

_伊那の弟子であり仲間でもあった塩原梅閑家の好意で入籍して、塩原清助の名を得、

内閣発足・・・1885=63歳：

*それを祝ってか、梅閑らの手で第三句集「余波の水くき」刊行されたが、放浪癖は止まらず、

帝国大学始・1886=64歳：

_火山峠近くの伊那村の乾田で倒れ、ボロボロの着ものをまとい汚物まみれの姿で発見されて搬送され、

国民之友始・1887=65歳：

塩原家で_没した。